

キルギス共和国の食生活

- 日常の食事と独立後の変化 -

○末田香里* 水谷令子** (*名女大、**鈴鹿国際大)

(目的) キルギス共和国は中央アジアの小国で、1991年に旧ソ連邦から独立した。独立後間もないキルギス共和国の庶民の日常の食生活および独立後の変化について調査した。

(方法) アンケートを依頼し(1997.5)、現地での聞き取りと観察(1997.7-8)によりに補足した。調査対象は首都ビシュケクに住む中・上流階層の120名(男:女=38:62)、平均年齢は29.8才であった。

(結果・考察) 1. 日常の食生活: 1) 食事の場所、時間帯: 料理は主に女性の仕事になっていた。食事はほとんどが自宅でとり、昼食時には学校職場で食べる人もいた。一緒に食べる人は本人をいれて朝には2.2人、昼2.2人、夕食時には3.25人であった。食事時間は、朝食は6-9時、昼食は12-14時、夕食は18-21時台と幅があった。2) 料理メニュー: 朝昼夕の食事は基本的には主食がパンで、ジャガイモ、サラダ、スープ、肉があげられていた。肉の頻度は朝<昼<夕食の順に高くなった。朝食では他にバター、卵、カーシャ、チーズが多かった。昼食ではプロフ、ボルシチ、マンティー、ラグマンなどの民族料理も食べられていた。夕食には昼食に食べられなかった果物、ボルソックなどもみられ、内容が豊富になっていた。3) 飲料: お茶が主流で、その他朝食時にはコーヒ、昼食はジュース、夜にはごく少数だがビール、ワインも飲まれていた。

2. 独立後の変化(1990年頃との比較): 食品の調達には市販品をよく使うようになり、食品購入も便利になったと答えた人が多く、市場経済化がうかがえた。食事の質、レストランの利用頻度は二極化し、貧富の差がでてきたことが推察された。